

## 「チーム学校」アンケート 調査結果について

教育支援専門職研究部門

### 【調査の目的】

現段階における、他職種への理解や、連携・協働することへの意識について調査することを通して、チーム学校に関する学生の理解や認識を測定する尺度を作成することを目的とする。加えて、在籍課程や学習内容によるチーム学校に関する理解や認識について明らかにし、今後、チーム学校の一員として活躍することのできる学生を育成していくために、どのような教育が必要であるかを検討する。

### 【方法】

授業時間を利用して、本学の全1年次の学生に対して一斉にアンケートを実施した。866人に配布を行い、729人から回答が得られた(回収率84.18%)。

アンケートの項目は、チーム学校の認知度やチーム学校に関する理解や認識を問う項目、教育支援専門職の仕事や役割についての理解度について問う項目から成っており、回答には約15分～20分を要した。

### 【結果】

#### 1. チーム学校の認知度

チーム学校という言葉の認知度を尋ねたところ、95人(13%)がよく知っている、107人(15%)が少し知っている、225人(31%)が聞いたことがある、297人(41%)がはじめて聞いたと回答した。

どのような形で知ったのかを尋ねたところ、133人の学生が“授業”，24人の学生が“授業以外(オープンキャンパスや学外活動など)”と回答した。“授業”と回答した学生によると、知るのに役立つ授業として、教員養成課程(以下、教員養成)の学生からは「キャリアデザインⅠ」「教師論」「教育原理」「初年次演習」「初年次学校体験活動事前指導」，教育支援専門職養成課程(以下、教育支援)の学生からは「教育経営学」「教育支援と心理/福祉/教育ガバナンス」が挙げられた。

#### 2. 「チーム学校に関する理解・認識」尺度の分析

尺度の分析の結果、「連携のスキル」「教育支援専門職の理解」「連携への開放性・積極性」「教師中心性」の4つの下位尺度からなる27項目の尺度が作成された(添付資料参照)。

#### 3. 課程による、チーム学校の理解や認識の違い

チーム学校の認知度や、チーム学校に関する理解や認識には、課程による違いがみられた。

チーム学校という言葉の認知度は、教育支援の学生の方が教員養成の学生よりも、有意に高かった。また、「連携のスキル」「教育支援専門職の理解」「連携への開放性・積極性」の得点は、教育支援の学生の方が教員養成の学生よりも有意に高く、反対に、「教師中心性」の得点は教員養成の学生の方が教育支援の学生よりも有意に高いという結果が得られた。

加えて、スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラー、学校事務の仕事内容や学校での役割についての理解度を尋ねたところ、教育支援の学生においては、いずれのコースの学生も、授業を通し

それぞれの仕事や役割について約3～4割の学生が理解していると思うと回答していたのに対し、教員養成の学生においては、ほとんどの学生が理解していないという回答であった。

#### 4. 課程による、チーム学校の理解や認識の仕方

現段階で本学の学生が抱えている、チーム学校に関する理解や認識の仕方は、以下の図のように4つに分類された。

それぞれの類型に含まれる各課程の学生数を算出したところ、「専門職理解高群」は、教員養成の学生が有意に少なく教育支援の学生が有意に多く含まれていた。反対に、「教師中心群」には、教員養成の学生が多く教育支援の学生が有意に少ないことが示された。

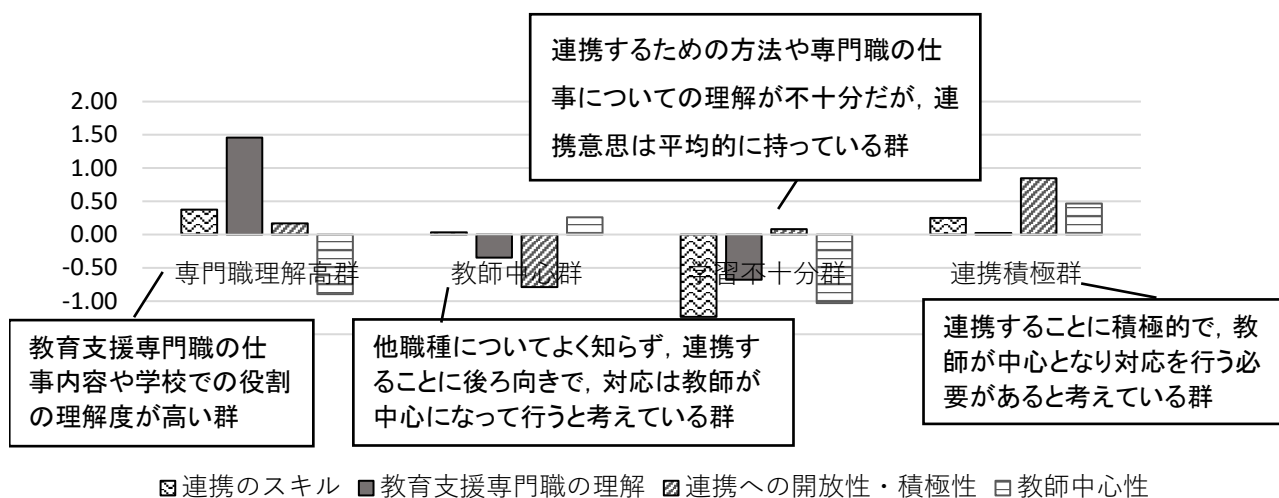


図 チーム学校の理解と認識の類型

#### 【考察】

在籍する課程によって、チーム学校に関する理解や認識の仕方が異なることが示された。教員養成の学生は、学校内では教師が中心となって対応にあたっていくという認識を持っており、他職種についてあまり知らなかった。対して教育支援の学生は、連携に対して前向きな姿勢を持っており、3～4割の学生が専門職の仕事や役割を理解していると感じていることがわかった。

このような課程による違いの背景として、教員養成の1年次学生は、他職種との連携や協働に関する実践的な授業がまだないために、入学前から抱いていた教師のイメージが先行したのではないかと考えられる。学生自身が目にする教師の姿や、メディアに登場する教師像は、子どものために一人で奮闘している印象が強く、教員志望の学生はこのような教師のイメージを抱いている者が多いのではないかと考えられる。また、専門職についてよく知らないがために、他職種との連携や協働のイメージを持つことができず、他職種については教師ができないことを手伝う補佐や助けてもらうというイメージを持っているのではないかと考えられる。今後は、教員養成と教育支援の学生が合同で模擬ケース会議をするような演習や、課程を超えた授業の受講等により、互いに他職種の仕事内容や役割を学ぶ機会が必要なのではないかと考えられた。

資料：「チーム学校」に関する理解や認識を問う尺度

連携スキル	28	他の課程やコースといった自分とは専門性の異なる人と、いじめや不登校、虐待といった子どもの問題について、対応を協議することができる
	17	他の課程やコースといった自分とは専門性の異なる人と、子どもの教育や関わり方について意見交換をすることができる
	15	子どもの教育や発達について、自分なりの考えを持っている
	20	教員の仕事内容や、学校での役割について理解している
	24	教育における家庭の役割を理解している
	22	管理職の仕事内容や、学校での役割について理解している
	7	教育における地域の役割を理解している
	12	学校内の様々な職種の役割分担について理解している
	10	自分が目指している職種の学校内での役割や専門性について、他者に説明することができる
	5	問題を抱えた児童生徒の保護者の、不安感や抵抗感などの気持ちを推察することができる
	27	児童生徒を支援する時、他職種同士がどのようにお互い関わり合っているのか理解している
職 援 教 解 の 専 育 理 門 支	30	スクールソーシャルワーカーの仕事内容や、学校での役割について理解している
	32	学校事務の仕事内容や、学校での役割について理解している
	31	スクールカウンセラーの仕事内容や、学校での役割について理解している
連携への積極性・開放性	4	問題時だけではなく日常生活の中でも、児童生徒と様々な職種の人との関わりは必要だ
	14	他職種の専門的な理論や技法を学ぶことで、教育活動の質を高めたい
	9	自分が目指している職種以外の職種の仕事内容や役割、専門性について学ぶ機会を持ちたい
	2	児童生徒の対応で困った時、他の人の力を借りたい
	26	児童生徒を支援する時、様々な職種の人と一緒にあって対応する方がうまくいく
	29	児童生徒の問題は特定の専門家が対応することであり、専門職以外の職種の者が関わることはない
	19	支援している児童生徒から得られた情報は、職種にかかわらず関わっている者すべての間で共有する必要がある
教師中心性	16	問題を抱えた児童生徒への支援に教師が時間を割く必要はなく、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーなど専門家に任せの方がよい
	1	様々な職種の中でも、教師が一番、児童生徒のことを理解しておく必要がある
	23	児童生徒の人間形成のためには、クラス活動から部活動まで、児童生徒のあらゆる場面に教師は関わるべきだ
	11	児童生徒が問題を起こすのは、教師の問題である
	21	学校内における児童生徒の問題は、教師が中心となって解決する必要がある